

第 14 回岩手県 C T 研究会報告



平成 22 年 9 月 25 日（土）県立中部病院大講堂において、第 14 回岩手県 C T 研究会を開催したので以下に報告をする。

研究会は、盛岡地区とその他の地区で交互に開催しているが、盛岡以外の地区開催は今年度より 2 巡目に入る。会場を昨年開業し現在県内で最も新しい病院として注目を集める県立中部病院にお願いし、施設見学について

も合わせてお願いした。内容については、テーマを「胸部領域」として、臨床を中心に基礎講座、症例検討、特別講演とした。特別講演では、県立中部病院の放射線診断科長、熊坂由紀子先生と同呼吸器外科長的那須元一先生に同じテーマでご講演いただいた。放射線科医と外科医が同じテーマで講演するという願ってもない講演は、熊坂先生のご好意により可能になったが、本会でも初めての試みであり、肺癌についての放射線科医と外科医のチーム医療の経験や臨床に寄与する画像の再考など、有用な講演であった。参加者は 74 名であり、第 1 回に次ぐものであった。更にこれも今回初めて、県外からの参加者（宮城県 1 名、新潟県 1 名）があった事を付け加えておく。



【日時・場所】

日時：平成 22 年 9 月 25 日（土）13:30～17:10

場所：岩手県立中部病院（大講堂）

参加者：74 名（賛助会員 12 名・県外 2 名）

【次第】

13:30 施設見学

14:00 開会（担当世話人挨拶：安藤和行）

14:05 <基礎講座>

座長 せいいてつ記念病院 駒木俊明

1. 「肺癌の分類と画像所見の基礎」
岩手医科大学 鎌田雅義
2. 「COPDのCT画像所見の基礎」
総合水沢病院 小島 実
3. 「びまん性肺疾患のHRCT画像所見の基礎」
藤沢町民病院 東山行雄

15:05 <症例検討会>

1. 「当院における胸部CTの1例」
盛岡友愛病院 兼平昭弘
2. 「肺ランゲルハンス細胞組織球症の1例」
藤沢町民病院 富澤正嗣
3. 「心電同期撮影を行った症例」
県立釜石病院 門前秀成
4. 「少量の胸水 –CT・超音波画像との比較–」
総合花巻病院 高橋義徳
5. 「縦隔腫瘍と思われた1例」
県立中部病院 漆田咲礼

15:55 休憩

16:10 <特別講演>

座長 県立中部病院 安藤和行

「肺癌CT –外科医とのコラボレーション–」

講師 県立中部病院 放射線診断科 科長 熊坂由紀子 先生
県立中部病院 呼吸器外科 科長 那須元一 先生

【内容】



<基礎講座>

座長 せいいてつ記念病院 駒木俊明

1. 「肺癌の分類とCT画像所見の基礎」 岩手医科大学 鎌田雅義

最初に肺癌の疫学に触れ、日本人の死因別死亡数で最も多い癌の中で、男性では1位、女性では2位であるとした。次いで肺癌の種類と頻度では肺癌の組織分類では、肺門型と肺野型に分

類され、更に病理学的には総細胞癌（10～15%）と非小細胞癌に分別される。非小細胞癌は線癌（50%以上）、扁平上皮癌（25～30%）、大細胞癌（数%）に大別されるとして、それぞれの臨床的な特徴や典型的な画像を供覧し丁寧に解説した。線癌については野口分類についても詳しく解説した。最後に悪性を示唆する画像所見についておさらいした後、原発性肺癌では0.1～0.2%と非常に稀な粘表皮癌の症例を供覧して終了した。

2. 「COPDのCT画像所見の基礎」 総合水沢病院 小島 実

「COPDとはどんな病気か」と「画像診断の役割」の2つの分けて解説した。前半のCOPDとはどんな病気？では、COPDの診断と治療のためのガイドラインを基にしたCOPD（慢性閉塞性肺疾患）の定義、種類、発生機序、疫学、診断基準について解説した。発生機序においては喫煙と密接な関係があることを力説し、参加者に対してタバコとの決別を勧める場面も見られた。後半の画像診断の役割では、画像診断の役割と画像所見の特徴を、CT画像を用いながら解説した。最後に独自に研究を進めているMinIPによる肺気腫の診断法についての有用性について解説した。

3. 「びまん性肺疾患のHRCT画像所見の基礎」 藤沢町民病院 東山行雄

HRCT（High-Resolution CT）の定義と目的から始まり、基本的な撮影技術、肺（二次小葉）の基本構造、異常影との関連付けと画像所見、撮影時の注意点と進めた。HRCTの画像所見では異常影と肺の二次小葉との関連付けが重要であることから、小葉中心性パターン、小葉辺縁性パターン、ランダムパターン、汎小葉性パターン、肺構造の改変については詳細に解説した。最後の撮影時の注意点では、高分解能アルゴリズム使用時のピットホールとしてノイズが増すことやAEC機能の使用、適正なスライス厚に触れて終了した。

<症例検討会>

座長 岩手医科大学循環器医療センター 村中健太

1. 「当院における胸部CTの1例」 盛岡友愛病院 兼平昭弘

自施設の装置及び胸部撮影プロトコルの紹介の後、検診で異常影を指摘され、CTを撮影した肺癌疑いの症例を供覧した。胸部X線写真とCT画像を比較するというごくあたり前なことであったが、しっかりと確認することが重要であることを改めて認識するような新鮮な発表であった。

2. 「肺ランゲルハンス細胞組織球症の1例」 藤沢町民病院 富澤正嗣

職場の検診で胸部写真異常影を指摘され、来院した症例で、検診の胸部写真では量肺野にびまん性に陰影が分布し、CTでは壁を有したのう胞構造の散在と小葉中心性の粒状影が認められた。内視鏡による生検でCD1aが4%確認されランゲルハンス細胞組織球症と

確定したと報告した。治療は禁煙のみで、9ヵ月後のフォローアップCTでは殆ど正常に戻ったという症例であった。本症例は、日本でも年間100例程度の報告しかないとの事で、貴重な症例であった。

3. 「心電同期で撮影を行った症例」 県立釜石病院 門前秀成

解離性大動脈瘤に対して、心電図同期で撮影した症例であった。解離性動脈瘤に対する心電図同期撮影については特に entry re entry の詳細な観察や真空と偽腔を隔てる flap の観察で有用であると報告がされているが、殆どが 64DAS の症例である。今回は 32DAS と時間的分解能では決して余裕のある機種ではないが、呼吸停止や造影効果の持続等の制約を克服しての症例であった。

4. 「少量の胸水 -CT・超音波画像との比較-」 総合花巻病院 高橋義徳

少量の胸水貯留の症例(12例)をCTとUSにて比較したもので、主に肺胸膜と壁側胸膜との識別と胸水の性状について比較を行った報告であり、結果は少量の胸水に対する存在診断及び肺胸膜についてはCTのほうが優れており、壁側胸膜の同定や胸水の性状の観察はUSが優れていたとの報告であった。USをと得意とする演者ならではの症例であり、興味を引くものであった。

5. 「縦隔腫瘍と思われた1例」 県立中部病院 漆田咲礼

突然の咯血と呼吸苦を訴えた患者の上縦隔に腫瘍を認め、造影CT、FDG-PETで縦隔腫瘍と判断し手術したが、実は腫瘍は胸膜に包まれており肺腫瘍であり更に病理診断では、炎症性の細胞浸潤やリンパ球浸潤が確認され腫瘍性変化は確認されなかったとの報告であった。演者に代わってコメントした放射線診断科長の熊坂先生は造影CTも良く見ると小のう胞が散在しており、慎重に読影すべき症例であったと話された。自施設におけるこのような症例はあまり表に出したくないものであるが、このような症例を参加者で共有できる事は非常に重要であり、提供していただいた県立中部病院には感謝申し上げたい。



<特別講演>

座長 県立中部病院 安藤和行

「肺癌 -外科医とのコラボレーション-

講師 県立中部病院 放射線診断科
科長 熊坂由紀子 先生

県立中部病院 呼吸器外科
科長 那須元一 先生

手術を施行した症例5例について、

放射線診断がどのように手術に寄与しているか、また手術に寄与する診断と画像処理の方法はどのようなものか放射線科医の立場と呼吸器外科それぞれの立場から解説していただいた。まず熊坂先生より、手術を前提とした画像の読影方法や画像処理についてのコツを丁寧に解説していただき、続いて那須先生より同じ症例について画像を基にどのように判断し手術したのか、実際の手術の動画を見ながら解説していただいた。両先生とも最も画像診断が有用であった症例として、右下葉肺癌の手術の際に造影CTのMPR画像で肺静脈の奇形が発見されたことを上げた。右下様に肺癌があり、下葉切除する際には通常であれば下肺静脈を切断するが、その症例では、下肺静脈より上肺静脈が分枝しており、知らずに切断すると大惨事につながったというものであった。我々の作成した画像が放射線科医、呼吸器外科医を通過し患者様に還元される過程の勉強と共に放射線科医が外科を理解し役立つ画像を提供しようとする姿勢と外科医が放射線診断を信頼するという言わばごくあたり前の形に、実際に検査や画像処理に携わる者として改めてチーム医療という言葉や臨床に寄与する検査や画像というものの再考する機会を与えていただいた有用な講演内容であった。熊坂、那須両先生には感謝申し上げたい。



平成 22 年 10 月 19 日

岩手県CT研究会 代表世話人 東山行雄